

平成12年、トヨタ自動車(株)を定年退職後、平成16年より光陽自動車(株)にてパート従業員として勤務。

「若者と共生 輝いて生きる」

日本の総人口に占める65歳以上の高齢者が20%を超えたことは、日本の現状と将来に大きな影響を与えることが予測され各行政機関はその対応策を展開しています。

しかし、何より重要なことは高齢者自身の人生に対する姿勢ではないでしょうか。

さて、私は高齢者就職相談室を介して自動車の生産設備を製造する、従業員が数十人の会社へ再就職しました。配属された溶接作業現場は若い人が中心で活気に満ちていましたが、溶接時に発生する大量の火花と強烈な光線に、先ずたじろいでしまいました。

更に鉄粉塵による顔や作業服の著しい汚れ、そして目は赤くなり夜になれば涙がボロボロ、高齢者への厳しい一撃でした。

一方、仕事は溶接機の電流調整が下手なことから溶接部品の手直しが続出、高齢者が仕事を求め職場の一員になることは並大抵でないことを思い知らされました。

「石の上にも3年」とは、その昔、親から何度も聞かされた言葉ですが、私が勤め始めて4日目の朝のことです。

職場の責任者H君28歳に事情を説明して退職を申し出たところ、無骨そうな彼は「俺達は毎日2時間の残業や。おじさんが辞めると、もっと残業が増えるんや」と呟きます。

横で話を聞いていたH君の同僚N君は「おじさん。あしたも来てや頼むでよ」と。

おじさん呼ばわりには少なからず抵抗はありましたが、飾り気がない2人の言葉は徐々に人の温もりを感じさせるものでした。

「そうか。俺は職場の若い人達に期待されているんだ思い直して今一度頑張ってみるか」、そう決意して2年数か月が過ぎます。

溶接作業も徐々に上達、職場の戦力として周囲からも認められるようになったことは、当初の苦労が大きかっただけに格別な喜びであることは申すまでもありません。又、現在は溶接後の組付け、塗装作業など守備範囲も拡大して職場の信頼を一層高めています。

私は40年勤めた物造りの会社を60歳で定年退職しましたが、この間に培った経験と知恵などを職場の若者に伝承できることも少なくないと自負しています。その一例はこの職場が実践しているQCサークル活動です。

この活動を詳細に説明する余白はありませんが、職場の問題点を解決するために4～5人がグループを構成して継続的に改善を進める企業内の小集団活動なのです。

私もサークルメンバーの一員として定期的なグループ会合に参加していますが、今の若者はパソコンや携帯電話などIT機器に対しては、極めて柔軟に対応できても「生身の人間」とのコミュニケーションは甚だ頼りないことを実感させられました。

こうした時こそ永年、企業の中で人に揉まれ経験を積み重ねた高齢者の出番と考え、積極的に話の輪に入り世代を越えて理解と交流を深めています。

昨今、特殊技術や技能、又高度な趣味などを活用した高齢者が各地で活躍している姿が報じられています。

私は何の技術や技能もない一介の高齢者ですが、少子高齢化社会を垣間見る時、ただ手をこまねいているのではあまりにも無責任のように思えてなりません。

高齢者には何かと厳しい生活環境とは思いますが、何事もプラ

ス思考で積極的に社会と関わり生きることが最重要に思います。

私は今、物造りの会社で溶接、塗装作業、そしてQCサークル活動など若者と共感し共に行動していますが、地道ではあっても、これも一つの社会貢献との信念で毎日を輝きながら元気に生きています。